

ブログ「中東と石油」:[https://blog.goo.ne.jp/maedatakayuki\\_1943](https://blog.goo.ne.jp/maedatakayuki_1943)

ブログ OCIN the Cloud:<https://huangyeyiye.blogspot.com/>

ホームページ OCIN INITIATIVE:<http://ocininitiative.maeda1.jp/>

ホームページ MY LIBRARY:<http://mylibrary.maeda1.jp/>

マイライブラリーNo.:0522

2021.1.13

## 首の皮一枚でつながった OPEC+(プラス)体制

### 1. 2020/21 年の協調減産と原油価格

昨年 1 月の Brent 原油の月間平均価格は 64 ドル/バレルであり、ロシアは 1,200 万 B/D 台の生産を継続していた。年初から本格的に流行し始めた新型コロナ (COVID-19) により世界経済は暗転し石油需要を直撃した。しかしロシアが減産を拒否し、これに反発したサウジアラビアの増産により価格は急落、4 月には 3 分の 1 近い 23 ドルまで下落した。米国のスポット市場では指標原油 WTI が一時マイナス価格になる異常事態すら生まれた。

事態の深刻さに背中を押され、OPEC と非 OPEC、いわゆる OPEC+(プラス)は 4 月 12 日、OPEC+閣僚会合(Opec Non Opec Ministerial Meeting、通称 ONOMM)で協調減産を決定した。減産量は 5-6 月 970 万 B/D、7-12 月 770 万 B/D とし、2021 年以降も 22 年 4 月まで 580 万 B/D とされた。これにより市場は安定を取り戻し、7 月及び 12 月の Brent 月間平均価格はそれぞれ 40 ドル及び 50 ドルまで回復した。

### 2. ロシアとサウジアラビアの対立と妥協

価格の上昇によりロシアなど OPEC+(プラス)各国から減産緩和の声があがるのは自然の成り行きであった。しかし COVID-19 の猛威は衰えることがなく、サウジアラビアは慎重論を唱え、2021 年 1 月以降の生産方針をめぐるロシアとサウジアラビアは再び対立する事態となった。

OPEC+の多くの産油国は歳入不足に苦しみ、減産緩和の急先鋒は非 OPEC 産油国のロシアとカザフスタンであった。これに対してサウジアラビアは OPEC 加盟国を引き締めて減産体制の維持を図った。しかし増産による歳入増加を望む OPEC 加盟国も少なくなく、減産枠を守らない国あるいは盟主サウジアラビアに反抗する国など OPEC 体制にも亀裂が生じた。

政治経済的には大国と言い難いサウジアラビアが大きな発言力を保てるのは OPEC のリーダーだからこそと言える。従ってサウジアラビアとしては OPEC 及び OPEC+の結束を乱すわけにはいかない。そこで同国は 12 月の ONOMM で 1 月の減産量を 50 万 B/D 緩和し 720 万 B/D とするとともに、1 月以降毎月 ONOMM を開いて見直すことで OPEC+の破綻を何とか回避したのであった。

1 月 5 日に開かれた第 13 回 ONOMM では減産幅 720 万 B/D に基づく国別生産レベルが示された。それによればサウジアラビアとロシアの生産量は共に 911.9 万 B/D とされ、その他の主な国はイラク

385.7 万 B/D、UAE262.6 万 B/D、クウェイト 232.9 万 B/D、メキシコ 175.3 万 B/D、ナイジェリア 151.6 万 B/D、カザフスタン 141.7 万 B/D などである。続く 2, 3 月の割当量も示されたが、目を引くのはロシアとカザフスタンの 2 カ国だけが減産量を緩和されており、OPEC10 カ国(注、イラン、リビア、ベネズエラは対象外)及び非 OPEC8 カ国の生産レベルは変更されなかったことである。減産量は大きくないもののロシアとカザフスタンが優遇されたことはサウジアラビアとロシアの対立と妥協を如実に表している。

さらに世界を驚かせたのは、ONOMM 会議後にサウジアラビアのアブドルアジズ石油相から同国が 2,3 月の 2 カ月間、自主的に 100 万 B/D 追加減産すると発表したことである。サウジアラビアの大判振る舞いにより世界の石油需給が引き締まることは間違いなく、現在 Brent 石油価格は 55 ドル/バレルに上昇している。

### 3. 今後の見通し

当面の問題は COVID-19 の終息による石油需要回復の見通しであろう。COVID-19 はワクチン接種が始まり感染者が減ると見込まれているが、第三波の流行が広まり、また変種ウィルス発生が確認されるなど終息の時期は見通せない。中国の景気回復が石油需要増にどの程度反映されるかも未知数である。

またこれまで景気回復は石油エネルギーの需要増加に直結していたが、長期的なエネルギーバランスとしては石油から再生エネルギーへの転換が時代の趨勢となっている。事実、BP など石油メジャー各社は石油からの脱却を掲げており、石油の将来は必ずしも明るくない。

またOPEC+に目を転じても、すでに述べた通り短期的に見る限りサウジアラビアとロシアの蜜月関係は破綻したと言えよう。その破綻を取り繕うためにサウジアラビアは 2, 3 月に 100 万B/Dの自主減産を公表した訳であるが、同国の財政状況は悪化の一途をたどっており大幅な減産を長期間行う体力はない。

OPEC+はエネルギー市場を支配するカルテルから単なる石油生産国クラブに変質し、王者サウジアラビアの黄金時代は過ぎ去ろうとしている。

以上

本件に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

荒葉一也

[Arehakazuya1@gmail.com](mailto:Arehakazuya1@gmail.com)